

かずさの博物誌

冬のモズ ～はやにえ～

文・写真／成田篤彦

2017.1.20



▲飛ぶモズのメス ミミズをくわえる
=2017年1月3日 木更津市



▲モズのオス 菜園でえさを探す
=2014年1月17日 木更津市

memo

モズ

スズメ目モズ科

全長約二十センチ。疎林や林縁、木のある草地、農耕地などに生息。秋から冬は単独生活。その後、つがいになり、一月下旬～八月に四～六個産卵する。カツ」ウに托卵（たくらん）されることがある。オスが春に他の鳥の鳴きまねをする。

『冬鷦のゆるやかに尾をふれるのみ
飯田蛇笏（山響集）』
今月、モズが葉を落としたサクラの枝で、尾をゆっくりと回し、落ち葉が積もる地面をじっとにらんでいました。冬のモズはほとんど鳴きません。
文頭の句は孤独で寡黙な冬のモズの情景を詠んだものと思います。
『冬鷦はただ菜畑の青き暉けり 野 村喜舟（新湊柿句集）』
この俳句のように上総では冬でも青々とした畑でえさを探すモズをよく見かけます。
モズは平地でも山地でも繁殖しますが、山地のものは秋冬には平地に下ります。
彼らはカエル、トカゲ、幼ヘビや昆虫やミミズなどの生きたえさをとります。
かつて、冬の谷津田でモズよりも大きなツグミを襲い、首を食いちぎったのを



▲モズのメス イナゴを捕らえる
=2007年12月15日 木更津市

見て驚きました。小さいのですが、モズはどう猛なハンターです。
さて、秋冬には昆虫も大部分は死んでしまいます。また、ヘビもカエルも地中に潜んでしまい、えさが乏しくなります。そのため、モズはオスもメスもえさを捕る場所を確保するため、「なわばり」をかまえます。そして、盛んに鳴き、他のモズを追い払い、単独で生活します。

冬になるとなわばりが定まり鳴かなくなります。
かつてはモズがすんでいる場所に、ケムシ、カナヘビ、アマガエル、アカガエル、小鳥などがバラのトゲや鉄条網の針や尖った枝先に刺してありました。これはモズが獲物を捕らえるとすぐずに食べずに尖った枝先などに突き刺す習性をもつていて、小動物を「はやにえ」と言います。

「はやにえ」を残す意味は「えさが乏しい冬に備えて食物を貯蔵する。なわばりの境界を示す。えさを足で押さえる代わりに尖った場所や木の又などに刺して固定し、食い残す。満腹時に、余分に捕られた時に獲物を刺したり、好物でない獲物を捕らえた時に刺す。」などが考えられるが、結論はでていらない』（日高敏隆監修 97『日本動物大百科4』）そうです。

ちなみに広辞苑に『はやにえ（速贊）』とは、（モズの捧げる初物の供物の意）モズが秋に虫などを捕らえて木の枝に貫いておくもので翌春、他の鳥のえさに供されてしまう』とあります。

えものを刺す行動は、モズがどう猛なハンターのイメージを強くしますが、一方で、昔の人は「はやにえ」をモズがその年に初めて捧げる神仏へのお供え物ととらえたのですね。昔の人の信心深いやさしい心を感じます。

それにしても身近でモズの「はやにえ」がほとんど見かけなくなってしまったのは残念です。



▲はやにえの小鳥 =2008年12月15日 袖ヶ浦市



▲モズのオスとメス（右下）

＝二〇〇八年三月三十日 木更津市